



Est.1912

まこと館だより

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局



🏆 児童事業本部～大忘年野球大会～ 🏆

緊急事態宣言が解除されて、この先の生活に少し明るい希望が見えはじめた昨年の秋ごろ、「みんなで野球でもやるか？」と、誰かが言ったのです。「外だから感染対策はバッチリですね」、「全員が一度はバッテリーボックスに入って施設対抗でもいいね、いや、混成チームでもおもしろそう!」、「12月、屋外だから寒いかな？豚汁とか大鍋で作ったら美味しいだろうな、軽食のデリバリーがあってもいい」、「災害時用の屋外用ストーブを出せば暖も取れますね」、「現地で実況放送を入れて、職員紹介なんてあったらおもしろいね」、「せっかくだから web を使って、参加できない職員も施設にいて観戦できるようにできないかな？」などなど、次から次にアイデアは生まれてきました。このような、ちょっとした思いつきから「児童事業本部、大忘年野球大会」は開催されました。当日は穏やかな晴天に恵まれて、これ以上ないくらいのピクニック日和。多摩川の土手にマーキーを張り、テーブルを設置しコンロやプロパンガスを持ち込み、さながら防災炊き出し訓練状態です。まずはプレイボール前のキレイな状態で記念撮影をし、「ケガに気を付けて」を合言葉に野球（ごっこ？）は始まりました。かつての経験がある人もそうでない人も、打席に入ると皆、笑顔を見せながらも内心は真剣そのものです。なかなか見られない対決シーンもふんだんにあり、若い頃の記憶と現状のギャップに困惑する人も続出。スーツ姿でもシャープなスイングを披露する人、この後の出張を控えてヒールのある履物での参加でもさっそうとベースを駆け抜ける経験者のカッコいい姿や、僕はサッカー派ですとあらためての宣言など、普段の職場では見られないそれぞれのユニークな一面を垣間見ることができ、とても楽しい時間を過ごしました。また、適度な距離を保ってそれぞれのタイミングで、熱々の豚汁やおにぎりなど、青空食堂も大好評でした。2時間ほどで、70名以上の職員が参加することができ、多くが「これは第二弾、『あり』だな」と感じたようです。日頃から職業倫理を高くもって臨んでいる皆さんは、この長く重く続く自粛自製の環境下で大きなストレスを知らず知らずのうちに溜め込んでいることなのでしょう。しかし、この状況に適したガス抜きの方法は、まだまだ工夫次第で、或いは、私たちの経験の中に、そのヒントがあるように思います。私は密かに、至誠ホームからの試合の申し入れがあることを期待しています。かつて、年に幾度か法人内の親睦を目的として、立川公園野球場で試合（ナイター）をした記憶がよみがえります。時にスタンドからの黄色い声援を受けながらの試合は、なかなかいいものでした。勝負は確か、学園が勝ち越していたように覚えています。その際は、児童事業本部一丸となって、誠心誠意、お相手させていただきまことを約束いたします。



(児童事業本部長 石田 芳朗)

本部事務局だより ③ 金銭感覚の衰退

コロナ禍の中、買物で現金で支払うよりも非現金(クレジットカード・ポイント等)での支払いが広がっており、財布の現金が減らない。今後は更に仮想通貨も広がりを見せ、近未来の子供たちにとって「お金」は紙幣や硬貨ではなく、アプリ上に表示される数字の羅列をイメージするほうがピンとくるという時代が目の前に来ている。我々の世代は、お金は使えば減る、銀行等に預金して貯蓄を増やす、そんな当たり前のことを「現金を実際に手にする」ことで学んできた。一方で、日本人の金銭感覚は、世界の国々と比較すると遅れをとっているといわれている。あるクレジット会社がアジア太平洋地域 17 カ国を対象にした調査では、日本の金融リテラシー（お金に関する知識と感性）のスコアは 17 カ国中 17 位だった。これは日本では多くの方が金融リテラシー教育を受けてこなかった（受ける機会がなかった）ことによるものだ。このままでは、金銭管理や家計管理が出来なくなり生活設計がたてられないばかりか、詐欺や自己破産等の金銭トラブルに巻き込まれる可能性が高い。子供のころから、お手伝いに応じてお小遣いが受け取れるなど、仕事と報酬の仕組みを日常で学ばせることが急務である。この金融リテラシーは家計のみならず施設経営においても需要であることは言うまでもない。足元の資金の在り高と今後の見通しを正しく把握し、いくら迄なら支出できるのか、何処までの収入減や支出増のリスクに耐えられるのかを数字で把握（リスク管理）しておかなければ経営にならない。（法人事務局長 野島 忠幸）

事業本部情報

児童事業本部

至誠こどもセンター事業であり、2001年から至誠学園が立川市から受託している『子どもショートステイ事業』。2004年からは日野市も受託しています。この事業は、保護者が病気、出産、入院などで、子どもの養育ができないとき、お子さんを短期間（1泊から6泊）お預かりし、食事や身のまわりのこと、通園・通学のお世話をするものです。約10年前の利用は、立川市22人延べ208日、日野市26人延べ167日でしたが、令和2年度は立川市33人延べ478日、日野市28人延べ379日と大幅に増えています。利用の理由は「レスパイト（休息）」が最も多く、育児疲れでのリピーターが増えています。例えば、お子さんが3、4人いて、発達にも課題を持ち子育てに悩んでいる保護者がショートステイを利用することで、ホッとできる時間が確保できることは、「また頑張ろう」と心身を立て直す機会になると思います。担当職員がフル回転で対応して、職員の健康管理も心配ですが、地域の親子さんの支援に頑張っています。（至誠こどもセンター所長 島田美喜）

保育事業本部

2022年北京オリンピックが催されカーリング、フィギュア、スピード様々な競技のアスリートから感動と勇気を頂きました。私は昭和58年至誠ナース愛児センターに入職から平成8年公設民営で始まった諏訪の森保育園に異動となり早40年となりました。ナースでは都立病院の駒込、八王子、府中と異動し、0歳から2歳の乳児保育を行い、雲野先生や小山所長、杉浦先生を中心に自主研修で集まり勉強したこと又、諏訪の森では3回の都の職員の方との申し送りをして和田上典子園長、杉浦主任の指導の下始めました。年長を担当し四苦八苦しながらも子ども達に寄り添いながら少しずつM（モンテッソーリ）活動が充実し、無理なく自然に今のオープンな保育となりました。昨年度の創設者墓参にて橋本富美子先生から「どうぞ皆さんこれからも困っている人の役に立つお仕事をし利用の方に喜ばれ、地域に貢献できるようなお仕事をなさって下さい。また法人の誇りを持ち多くの仲間、同志を思いやり、よき働き人として頑張ってください。」100歳になられても凛としたお姿とご挨拶はまことの心と重なり神々しく胸が熱くなりました。今日まで支えて下さった先輩と仲間の皆様ありがとうございました。（諏訪の森保育園 園長 齊藤 佐知子）

高齢事業本部至誠ホーム

今年の冬は、「冬らしい」寒さに見舞われています。3年目に突入した新型コロナウイルス感染症との対峙と重なって、気持ちも内向きになりがちでしたが、ふと園庭に目を向けると、白梅と紅梅の愛らしい花が寒さに負けずに咲いていました。季節は巡り、春はそこまでやってきてくれるようです。

さて、ホームでも新たな春を迎えるために、今年度の締めくくりと、来年度の準備を進めているところです。何と言っても長いお付き合いとなってしまった新型コロナウイルス感染症対策を抜きにしては進められない状況であるのも確かです。職員関係では、「職員大忘年会」、「新任研修終了時懇親会」、「入職3か月後昼食会」、「職員歓送迎会」…等々、恒例としていた大切なイベントが軒並み中止となっています。利用者・ご家族関係では、行事はほぼ中止、活動にも大きな制限が設けられました。何よりの打撃は、面会や外出の制限ではなかったかと思います。当然ながら、事業運営にも大きな負の影響を受けました。こうした予防対策の中でも、残念ながら複数の施設や事業所において感染者が発生し、環境や感染状況等に合わせて対応をしてきました。

次年度は経験や学んだこと等を活かして「できない」中でも「できること」をさらに進めていきたいと思えます。また、「できること」をその時々状況とバランスをとりつつ「どのように実践していくか」柔軟な対応を進めていくことが必要となると思えます。

来年度も、高齢事業本部は「今できることの100%実施」を目標に頑張っています。

（至誠ホームアウリンコ 園長 よしがみ 恵子）

（編集後記）1月、2月の寒さを乗り越え、暖かい季節の到来です。それと同時に花粉が舞い始めますね。コロナウイルスと花粉症の症状が似ている様で・・・花粉対策は早めから始めるとよいみたいです。（小）